

メデアファイロソフィー

第六回〈未来〉を紡ぐ

高田明典

ああ、これまで私は哲学も、情報工学も、心理学も、また要らんことに神学までも、結構たいへんな思いをしてそこそこのところまで勉強してきた。それなのにこの通りだ。かわいそうなことに私という馬鹿者は昔よりもちつとも利口になっていない。マスターだの、ドクターだのという課程を通ってからもうかれこれ十年ばかりの間、学生を叱ったり誉めたりしながら指導しているが——実は私たちは何も知ることができないということがわかつている^二。

そして事実、何も知り得ていない。ときどき思う。「学問など空しい」と——。しかし私は学ぶことをやめはしない。やめることなど思いもよらない——でもどうして？

「真理」に到達しようなどという大それた目的は持っていない。仮に真理なるものが存在するとしても、人知がそれに到達できないことは、現代思想ではむしろ当たり前のこととされている。なにより、長い人類の歴史の中でも、それに到達した人は一人もいない^三。

しかし一方で、ほぼすべての学問は「正しさ」を基礎におく。正しいことは、研究の大前提である。そこで、もしも真理に到達できないのならは何を以て「正しさ」とするのかという問題が発生するが、その考え方は「正しくない」。なぜなら、「正

^一ゲーテ『ファウスト』「悲劇 第一部」冒頭による。
^二「ファウスト」

ああ、これでおれは哲学も、
法学も、医学も、

また要らんことに神学までも、
容易ならぬ苦労をしてどん底まで研究してみた。

それなのにこの通りだ、可哀そうにおれという阿呆が。
昔よりちつとも利口になっていないじゃないか。

マギステルだの、ドクトルとさえ名のつて、
もうかれこれ十年ばかりのあいだ、
学生の鼻づらをひっ掴まえて、
上げたり下げたり斜めに横に引回してはいるが——

実はわれわれになにも知り得るものではないということがわかつている。」(ゲーテ(著)
相良守峯(訳) 岩波文庫、一九五八)

^三「質量不変の法則」？ アインシュタインによれば、移動する物体の質量は変化する。もちろんその当のアインシュタインでさえ、真理に到達したなどとは言えない。

しき」とは、「真理との距離」によって判定されるのではなく、ある基盤や論理の枠組みの中での整合性の度合いによって判定されるべきものだからだ^三。となると、ここで、その基盤や枠組みが問題となる。ある基盤のもとで正しいとされたことは、別の基盤のもとでは正しくない^四とされる場合があるからだ。先日（二〇〇七年六月八日）亡くなったローティ^四は、『偶然性・アイロニー・連帯』において、それを「終極の語彙」という概念によって説明した。「それが『終極』であるのは、こうした言葉の価値が疑われたときに、この言葉を使う者は循環論法に陥らざるをえない、という意味においてである。この言葉は、私たちが言語を手放さないかぎりどこまでもついてくる。逆にいえば、こうした言葉を手放したとしたら、その先にあるのは、無力な受動性か、暴力への訴えだけである。」

たとえば、「それが神の意志だ」という「終極の語彙」は、それを信じる者同士の間でしか意味を持たないし、「それが論理学上の帰結だ」というものも同様である。どうして「神の意志だ」と言えるのか議論することもできるし、どうして「論理学上の帰結だ」と言えるのかも議論できるが、「神の意志だからって、それが何？」とか、「論理学上の帰結だからって、何だっというの？」という疑義に対しては反論できない——つまり「でもそんな関係ねえ！^五」という主張は、最強だということ。

このような考えかたは、ややもすると「相対主義」と揶揄され、それを毛嫌いする人も少なくない。「それぞれの正しさが存在する」のであれば、学問や思想にどのような意味があるのか、というわけだ^六。そのとき、相対主義とは「何でもあり」「どんなことでも許容する」という考え方として批判される^七。その批判は一部は正しいが、終極の語彙を手放さないためには、それを許容するしかない。迎合したり、自分の「終極の語彙」を捨てたりするのではなく、それぞれの正しさを許容すると

三 構造主義科学論の基本的立脚点である。ただし、構造主義科学論は、現在のすべて、科学の基礎を構成しているものでもある。くわしくは拙著『世界をよくする現代思想入門』（ちくま新書）を参照のこと……あ、これも絶版かあ。ちなみに出版業界では、「絶版」という言葉が使われることはあまりなく、「品切れ重版未定」とされることが多い。秀和システムからは「絶版通知書」というのが送られてきたことがある。ちょっと凹むね。

四 リチャード・ローティ (Rorty, Richard)。米国の哲学者。自他ともに認める「ポストモダニスト」。

五 当時は、まだ「小島よしお」が流行っていた。

六 学問の目的は真理の探究だ、などと恥ずかしげもなく不用意に言っている人（多くは理系の自然科学者）を見ると、悲しくなる。勉強は大事だよな。

七 特に、構造主義に対してこの批判が投げかけられることが多いのだが、それは決定的な誤解に基づいている。これは、ここで説明すると長くなるのでやめるが、拙著『構造主義方法論入門』や『世界をよくする現代思想入門』で説明してある。両方とも絶版だった。

というのが「相対主義」である^八。もとより、「自分の正しさ」を放棄するのであれば、それは相対主義ですらない。相対主義とは、自分の正しさを捨てないための一つの（そしてかなり有効な）方法である——そこでは、自分も正しいとされるのだから^九。しかし人は往々にして、あらゆる正しさに疑念を抱く。それは決して悪いことではなく、むしろ率先して勧められるべき営為であるが、「すべて正しくない」という状態に陥ることもある。「この世界に真理など存在しない」「絶対的に正しいことなど存在しない」ことは当然としても、それを盾に「だから何をやっても無駄だ」と考えて、前向きな営みをしなくなる。しかしそれは変だ。

あるゴールに到達できないからといって「何をやっても無駄」と考えるのは、そのゴールに執着しているからだ。もしも諦めたのであれば、他のことをすることが出来る。「そのゴールにしか意味がない」と考えているから——諦めたにも関わらずその希望を結局捨てることができないから、すべてが空しくなる^{一〇}。「諦める」とは、そういうことではないはずだ。もしも諦められないのであれば、不可能とわかってもゴールに向かって走り続けるしかない。

ローティは「この世界に普遍的真理など存在しない」と考える、いわゆる「ニヒリスト」であり、また、自らをアイロニストであると公言して憚らなかつたが、その実ローティの思想は希望に溢れている。「徹底したニヒリストこそ、究極の樂觀主義者だ」と言われる所以である。ローティの指摘するとおり、学問など空しいし、思想は娯乐的エッセイと何ら変わるものではないかもしれない。しかし、そこを基底として何かを作り上げていこうとする、もしくは、作り上げることが可能であると考え、ローティの思想は、究極のニヒリズムを経由して到達することが出来る新しい地平であり、希望に満ち溢れた樂觀主義だ——どうせ何もないのだから、何か作ろうよ——。つまり、「そのゴールには到達できない」という地点を新たなスター

ハレヴィイーストロースの「文化の相対主義」（それぞれの文化は、その内部で整合的である）と、「価値の相対主義」（それぞれの価値観は、同様に正しい）を混同してはならない。価値の相対主義は端的に誤りである。それは、価値観とは「未来を紡ぐための基礎」だからである。ただし、過去において別の文化圏で採用されていた価値観を否定したり「正しくない」とすることには、ほとんど何の意味もない。問題は、私たちが、もしくはこの社会が、どのような価値を採用していくべきか、ということではないからだ。

^九 「自分にとって」という意味。もちろん正しい可能性がある、ということであり、検討の結果、正しくない（整合的でない）こともありうる。

^{一〇} だから虚無主義とか厭世主義とかは、端的に間違っている。「この世界に正しいことなど一つもない」「人間は絶対に真理に到達することができない」と考えているのであれば、それをウジウジ悩む必要などないはずだ。そこで立ち止まってしまふのは、「正しいことの追求」「真理の追求」を金科玉条のものとしていることの裏返しである。

トラインとして、そのうえで「何ができるのか」を考えるとということである。

どうせこの世の中はよくならない、と諦念した瞬間に、「世の中をよくしたい」という目的から自由になれる。本当のことなどわからない、と諦めた瞬間に、「本当のことを知りたい」という目的から自由になれる。問題は、そのあとだ。そこで立ち止まってしまふのは、まだその目的に縛られているからに他ならない。そうではなく、そこから歩き始めなければならない。

ガダマー二も、その地点からスタートした。異なる「終極の語彙」を持つ人間たちが交流し対話することによって、新たな語彙が生れる。そのような営みは、人が対話を続ける限り続く。それは決して、「あるゴール」に到達することを目的としているわけでもなく、また、その方向を指し示しているわけでもない。ガダマーは『哲学 芸術 言語』において、こう指摘する。「そもそも万人共通の言語という問題はなく、あるのはただ誰もが異なる言語を有するにも関わらず、個人、民族、さらには時代の境界を越えて了解がなされる、という奇蹟だけである。二」ガダマーの「地平融合」という概念は、この説明によって十分に理解される。私たちは、了解を通して「皆の正しさ」を追い求めることができる。ガダマーはこう続ける。「われわれが真理のためのあらゆる努力をなすうちに驚きながらも承認するのは、呼びかけや応答なしに、したがってまたかちとられた同意という共通性なくしては、真理を語れないということである。」「ここでガダマーは「普遍的な真理」という概念が成立しないと主張している。「真理」とは、「了解によって構築された共通性」もしくは「共通する終極の語彙」のもとでしか成立しない。つまり、ここでガダマーが言う「真理」とは、終極の語彙を共有する者たちの間での「正しさ」である。これは、ローティの「連帯」という概念と同じだ。了解は、呼びかけと応答の連鎖によってなされる。終極の語彙を共有する者たちの範囲を広げていくこと、もしくは、多くの者たちが共有する新たな終極の語彙を生みだしていく営みが「地平融合」であり「連帯」である。

もちろん、ガダマーの言う了解や、ローティの言う連帯に、過度に期待することなどできない。この世の中の現実を少し見てみれば、その種の了解や連帯とは無縁の生活を送っている人間が大半であることが簡単にわかる。了解や連帯どころではない。まともに会話すらできない人間のほうが圧倒的に多い——悲しいことに、「最髙学府」などと呼ばれ、「論理の府」であるはずの大学の中においてさえ。そしてま

二 ハンス・ゲオルグ・ガダマー (Gadamer, Hans Georg)。『真理と方法』。

三 ガダマー (著) 斎藤博・近藤重明・玉井治 (訳) 『哲学・芸術・言語』、未来社、一九七
七、七六頁。二〇〇一年に「復刊版」が出版されている。

た「厭人主義」という名前のニヒリズムに逃げ込むことになる——私のことだ。アララン^三は『定義集』でこう言う。「人間嫌い— MISANTHROPIE ———「・厭人主義」人間に対する愛で、自分が欺されたと早まって結論しているもの。人間嫌いの中には大きな希望 [ESPÉRANCE] と大きな幻滅とがある。慈悲 [CHARITÉ] は人間嫌いになるまいとする一種の誓いである。「他者に対して過大な希望を持ち、それを捨てられずに幻滅する。「どうせわかりあえない」と諦めているにもかかわらず、「わかりあうことにはしか意味がない」と考えているから、そうなる。難解な概念ではあるが「慈悲」によってそれを回避することができる」とアラランは言う。それはまったく理由のない「赦し^四」であり、「愛」の一つの形態でもある。

繰り返す。「この世界に普遍的真理など存在しない」し「絶対的な正しさ」もないし、「他者とは究極にわかりあえない」——そこそがスタートラインだ、と。このスタートラインにおいては「それぞれの正しさ」が存在している。それを「皆の正しさ」にしていく営みが、学問である。ある考えや行動がいかに醜悪なものであったとしても、それが過去のものである以上、赦す他はない^五。赦すからこそ、呼びかけが意味を持ち、対話が始まる^六。

学問とは、過去の現象を分類したり価値付けたりする「後ろ向きの営み」ではない。それらの営みは、未来を紡ぐために必要となるだけである。したがって、過去および現在の現象に関しては「それぞれの正しさ」があると考えてるが、未来に発生するのであるう現象は「皆の正しさ」のもとにあるべきだと考える。私たちは時折過去を振り返りもするが、その視線は基本的には未来を見据えているし、また、そうではなくてはならない。すべての学問は、未来を紡ぐ営みである。

そしてまた、人は「ほぼ確実に、望ましい結果が得られないと思われる目的」のためにさえ、努力することができる。それは、「ゴールに到達すること」に意味があ

^三 アラン (Alain)。フランスの哲学者。アランは筆名で、本名は Emile-Auguste Chartier。『幸福論』『定義集』。

^四 これを「論理」であると考えてはならない。赦しは、非論理的に行われるほかはない。功利的な意味での「許し」「許容」にまったく意味がないとは思わないが、それは「ここでいう「赦し」とは異なる。その意味をこめて、ここでは「赦し」という字をあてている。

^五 仮に「赦さない」として、そのときそこに何が生じるかを考えれば、答えは自ずと明らかであると思われる。

^六 ただし、呼びかけを有効なものとする「ため」や、対話を始める「ため」に、赦すのではない。それは「赦し」ではなく、功利的もしくは合目的な「許し」「許容」ではない。前述のように、非論理的な赦しが最初に存在し、単に時間的にそれに続く形で、呼びかけや対話が発生するだけである。

るのではなく、「目指すこと」に意味があると考えていることによる。

たとえば、私はジャズドラマーになることを目指しているが、それがほぼ絶望的に不可能であることを誰よりもよく知っている（壊滅的に元も子もない言い方をすれば「ヘタクソ」なのだ）。しかし私はこの「目的」に束縛されていない。なれないことがわかっていて努力するのは変だと思ってもいいかもしれないが、それは違う。たとえ絶望的に不可能であっても、それに向けて努力することは、楽しい。正直なところこれまで二十年以上もやってきてダメなのだから、あと何年やってもダメだろうと「確信」している——でもそんな関係ねえ！——どうせ諦めているのだから。

私たちの行動は、「ゴールにどれだけ近づいたか」で評価されるのではなく、「昨日の自分に比べて、今日、どのように変化したか」で評価される。「ゴールにどれくらい近づいたか」の判断は極めて困難だが、変化を判断するのは比較的容易である。ここでまた問題が発生する。その変化をどう判断するのか、ということである。それは、その変化が好ましい方向へのものであるか否かは、「ゴール」や「到達目標」を想定していなければ不可能だと考えられるからだ。つまり、その意味での「ゴールの像」は持つていなければならない。「到達することを諦めたゴールの像」を持ち続けるのは難しい。ローティが自らをアイロニストであると定義するのは、その矛盾した状態の表現である^七。そして私たちは、様々な領域で、そのような矛盾した状態を自らに課し、それに耐えていかななくてはならない。

水木しげる『悪魔くん千年王国』の中で、蛙男がこう言う。「むかしから、心ある人々は、病気の人や老人や、さまざまな不幸な人びともおなじように生活できる世界を作ろうとした……。キリストでもシャカでもマルクスでも悪魔くんでも、みな、同じことだ。それぞれ方法はちがっているが、根本にある考えはおなじなんだ。世界がひとつになり、貧乏人や不幸のない世界をつくることは……。おそかれはやかれだれかが手をつけなければならない人類の宿題ではないのか……。」この蛙男の言葉は重い。しかしここで語られている目的に束縛されてはならない。蛙男はその言葉に束縛されていない。もしもその目的に縛られるならば、人は簡単にニヒリズムに、そして厭人主義に、陥る。それを諦めるところからすべての営みが始まる。そして諦めつつも、そのゴールの映像を自らの中にしつかりと持ち続けることが求められる。昨日よりも今日、今日よりも明日、「正しさ」の地平を広げていくこと。そしてそのために呼びかけ、応え、対話する——学問とは、自分と対話することでもある。

^七 ここで、アイロニー (irony) とは、「皮肉」という意味ではなく、「反語」「二重性」「矛盾性」のことを指す。ローティは「諦めているゴール」を、それと自覚しつつ、持ち続けている。つまり、この世界は「正しく」などならないし、「理想郷」にもならないと覚悟しながら、そのゴールを諦め切れずに持ち続けるのが「アイロニスト」。

その対話の過程では、「諦めた」自分を見つめなおし、ときに赦すことも必要とされる——「諦められるのか」と問いかけ、日々それを修正する。ゴールに束縛されないためには、それを捨てられることが重要だ。

蛙男は、悪魔くんを裏切ったヤモリビト（の偽者）を赦す。この「赦し」は突発的であり、そこには明確な理由が存在しない（赦された側のヤモリビトさえ「エエッ」と驚いている）。『悪魔くん千年王国』の中で、私が最も美しいと感じるシーンだ。

さらに、「では『千年王国戦争』はまだつづくのですか」というヤモリビトの問いかけに対して、蛙男はこう答える——「命があるかぎりやめられん」「つづく」のではなく、「やめられない」——なぜなら、未来は過去の延長上にあるものなのではなく、私たちが創りだしてゆくものだから^{一八}。

未来を想像することが、未来を創造することにつながる。そして、「とりあえずの正しさ」に耐えられる人間だけが、未来を想像／創造することができる。

すべての現象はうつろいゆくものであり、ただの映像にすぎない。観念や理想の世界において実現できると考えられるものであっても、それは、言葉で表現することさえ困難なものであり、現実の世界では決して到達することのできないものである。——愛と赦しだけが、私たちを救うことができる^{一九}。

（初出 『文學界』二〇〇七年九月号）

^{一八} ヤモリビトは「時代精神」を信奉するという意味でヘーゲル的であり、蛙男は時代を超え変革させる人間の意志を信奉するという意味でニーチェ的（超人思想）である。ちなみに『悪魔くん千年王国』には「ファウスト博士」も登場するが、頭に石を落とされて、いとも簡単に死んでしまう……（おいおい）。

^{一九} ゲーテ『ファウスト』末尾による。

「神秘の合唱」

すべての無常のものは
ただ映像にすぎず。

及び得ざるもの

ここには実現せられ、

名状しがたきもの

ここには成し遂げられぬ。

永遠なる女性は

われらを引きて昇らしむ。」（ゲーテ（著）相良守峯（訳）ファウスト 第二部、岩波文庫、

一九五八）